

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 408

明日に向かう報復は人を限りなく零に近づけ、自由にする

03年10月12日、作家のスーザン・ソントグはドイツ書籍出版・販売協会平和賞を受賞し、パウルス城での授賞式で記念講演を行った。

「文学は自由そのものである」と題されたその講演記録が、『世界』(04・1)に掲載されている。単なる謝辞や儀礼的な挨拶で終わらないのが、ソントグである。早速彼女はアメリカ合衆国大使のダニエル・コウツがこの場への招待を受けていたにもかかわらず、欠席したことを冒頭で取り上げている。《これで明らかなことは、コウツ氏が、正常な外交上の責務を果たすことのみならず、そして私の - 国の利益と名望を代表することよりも、ブッシュ政権のイデオロギー的立場と怨恨に根ざした反動性の側に立つことを大切にしていることです》と述べて、こう続ける。

《コウツ大使は欠席を選択しましたが、その理由は、イラク侵攻と占領に代表されるアメリカの外交政策の新たな抜本的な旋回に対して、私が新聞紙上、TV インタビュー、雑誌の短い記事などで表明してきた批判のせいではないかと推察します。私としては、ドイツにおいて同氏が代表する国の市民がドイツでも重要な賞を受けるといふ栄誉にあずかったわけですから、彼はここに臨席するべきだと思います。》

もちろん彼女は、コウツ大使の欠席を詰っているわけではない。そうではなく、9・11以降の《ブッシュ政権のイデオロギー的立場と怨恨に根ざした反動性》を先鋭的に批判するソントグへの反感と、そんな彼女によりによって平和賞を授与するというドイツ書籍出版・販売協会のブッシュ政権への当て付けとも思える仕打ちに対する反撥から、欠席を選択したことに象徴される問題を講演のテーマとして彼女は語ろうとしていたからだ。コウツ大使の欠席如何にかかわらず、彼女がその講演テーマを当初から予定していたとするなら、大使の欠席はまさしく身をもって彼女の講演テーマを大きく浮かび上がらせていたといえる。

アメリカ合衆国大使の欠席という事態からすでに授賞式での講演テーマが定められているように見える、その場で語る自らの場所について彼女はこう明確に指し示す。

《アメリカ大使はみずからの国、そのすべてを代表すべき義務を負っています。言うまでもなく、私はアメリカを代表してはいません。ブッシュ氏や彼のアドヴァイザーたちの帝國的な綱領を支持しない相当数ではあっても少数派の人々すら、私はその人たちを代表しているわけではありません。文学と文学に関する特定の考え方と、良心と良心や責務に関する特定の考え方以外には、自分はなにも代表していないとむしろ思っています。しかし、ヨーロッパ主要国のひとつであるドイツのこの賞の私への授賞理由には、私の役割としてアメリカとドイツ両国を結ぶ「知識人大使」という言葉が述べられてい

ます（もちろん、もっとも控え目に、単なる比喩として大使という言葉が使われているにすぎないのですが）。そのことは充分承知していながらも、私が意欲と熱意をもって埋めようとしていとされるヨーロッパとアメリカ合衆国との間の周知ともいえる溝について、いくつかの考えをお伝えしたい、という誘惑には勝てません。》

コウツ大使の欠席は、この《ヨーロッパとアメリカ合衆国との間の周知ともいえる溝》に淵源しているのであり、ソクタグはヨーロッパとアメリカの対立の根深さを覗き込んでいく。《数十年前まではアメリカの人口の多くはヨーロッパ系の人々で》構成されていたにもかかわらず、当初から《ヨーロッパとアメリカとの差異》は土中に大きく埋もれており、そのことを的確に見抜いていた外国人として、彼女は《1831年にまだ若いアメリカを訪れたアレクシス・トックヴィル》と、《80年前、これまでアメリカ文化について書かれたなかでももっとも面白い本》を出したD・H・ローレンスに注目し、《二人とも、当時、ヨーロッパの子供であるアメリカがヨーロッパのアンティテーゼとなりつつある、いや、すでにそうなっていることを認識していました。》

ソクタグはアメリカとヨーロッパの対照について、《19世紀を通じてアメリカ文学の大半》からさまざまなメロディーを引きだす。《アメリカの天真爛漫さとヨーロッパの洗練、アメリカのプラグマティズムとヨーロッパの理知的思考、アメリカのエネルギーとヨーロッパの厭世的体質、アメリカの愚直さとヨーロッパの冷笑的姿勢、アメリカの善意とヨーロッパの悪意、アメリカの道德主義とヨーロッパの妥協の才》というように。《ヨーロッパ愛好派はこれらの厳かなアンティテーゼをもとにしてアメリカを商業主義の野蛮な国、ヨーロッパを高尚な文化の地と決めつけ、ヨーロッパ嫌いの連中はといえば、アメリカは理想主義、開放性、民主主義に立脚している、かたやヨーロッパは衰退しつつある、そして俗物的な洗練を信奉しているという、既存の見方に同調》するが、トックヴィルとローレンスは《もっと冷酷なことを看取してい》る。

《ヨーロッパとヨーロッパ的価値観からの独立宣言はいわずもがな、ヨーロッパの価値観と力を刻々とむしばみ、圧殺する動きが進行している、と言います。「古いものを打破しなければ、新しいものをもつことはできない」とローレンスは書いています。「古いものに当たるのがヨーロッパだった。アメリカが新しいものとなるしかなかった。新しいものは古いものの死を意味する。」

アメリカは、民主主義 - とくに文化的な面での民主主義、作法の民主主義 - を足がかりとしてヨーロッパ破壊という使命を遂行していた、とローレンスは喝破しました。その任務を達成したあかつきには、アメリカは民主主義からまた別のものに向かうかもしれない、と。（もしかしたら、その別のものというのが現在起こりつつあることなのかもしれません。）》

トックヴィルとローレンスは文学の重要な機能の一つである「予言」（洞察といったほうがいいかもしれないが）を行使したといえるが、その「予言」は21世紀初頭に勃発した9・11テロ以降、剥きだしの事態として進行しつつある現実的な様相を浮かび上がらせる。《意志堅固なアメリカの国防長官がヨーロッパ内に反目の楔を打ち込もう

としたのは偶然ではありません - 「古い」ヨーロッパ(悪玉)と「新しい」ヨーロッパ(善玉)に二分し、誰もがこれを忘れないように仕組んだのです。ドイツ、フランス、ベルギーを「古い」ヨーロッパに仮託し、かたやスペイン、イタリア、ポーランド、ウクライナ、オランダ、ハンガリー、チェコ共和国、そしてブルガリアが「新しい」ヨーロッパの一員を自認するようになったのは、どういう経緯だったのか。答え。現在のアメリカの政治的、軍事的な力の拡大を支持することが、「新しい」ほう、つまりより望ましい分類に参入する条件になっているのです。アメリカに添って立つなら誰であれ「新しい」ことになるのです。

たとえその動機が領土拡張とか希少な資源の獲得といった昔ながらのものであっても、近代のあらゆる戦争は文明同士の衝突、文化戦争として仕立て上げられ、それぞれの側が自分たちこそ優位な立場にあると主張し、相手を野蛮だとそしめるのです。敵はかならず「我々の生き方」にとっての脅威であるとされ、より高等な、良質な価値にたいする不信心者、冒涇者、汚染者、その神聖を冒す者と決めつけられます。》

「古い」ヨーロッパと「新しい」アメリカという対立図式が、「古い」ヨーロッパと「新しい」ヨーロッパの反目に転移し、ヨーロッパ内部の反目に火をつけるアメリカ人を「野蛮人」と決めつけ、《ビジネスという卑しい価値観でヨーロッパ文明を汚染するアメリカ(と世界のユダヤ人)、と悪口雑言を投げつけ》る《親ヨーロッパ派の紋切り型の図式のほぼ逆像》のなかで、アメリカ人はこう言い返す。

《自分たちアメリカ人こそ文明を防衛しているのだと。野蛮人の群はもはや棚の外側にはおらず、内部に、あらゆる繁栄する都市にいて、大騒乱をたくらんでいるという図式。「チョコレート生産諸国」(フランス、ドイツ、ベルギー)は脇にやられ、一方で、「意志」 - と、かたわらには神 - を有する国がテロリズム(今ではそれが野蛮さと抱き合わせになっています)に抗する戦いに邁進している、と。》

もちろん、アメリカとヨーロッパがかつて《共通の感情でむすばれていた》時期がないわけではなかった。例外だったかもしれないとしても、《第二次世界大戦から冷戦期をつうじた時期》、ヨーロッパは《アメリカの介入、援助、支持に深い感謝を抱》き、《ヨーロッパの救済者としての自国の役回りにアメリカ人は気をよくして(...)ヨーロッパが永遠に感謝の気持ちを抱き続けることを期待するようにな》ったが、ヨーロッパ人が9・11《直後のアメリカ合衆国へのきわめて強い同情》を示したそれ以降、両者は互いに疎遠になっていった。

《少数派、特権的な少数の人々に限られ》ていたとしても、かつて《かなりの数のヨーロッパ人にとって、アメリカは大いなる逃避の地だった》し、逆に《「文化」を求めるアメリカ人にとってヨーロッパは何世代にもわたって格好の逃避の地》だったのに、《今やアメリカは自身を文明の擁護者、ヨーロッパの救済者であるとみなし、それが何故ヨーロッパ人には分からないのか、いぶかしんでいるのです。そしてヨーロッパ人は、アメリカを無謀な戦争国家とみなしています - この形容に対してアメリカ人は、ヨーロッパをアメリカの敵とみなすことで仕返しをしているのです。ヨーロッパの平和主義は

アメリカの弱体化を狙った表面だけの取り繕いにすぎないという言い方が、現実にはアメリカ国内ではますます多く聞かれるようになりました。とくにフランスは、世界の出来事を動かすに当たってアメリカと対等に、いやアメリカより優位に立とうとさえ画策している、と考えられています。》

「彼ら」と「我ら」という《世界を分極化する用語》は、《かつてはアメリカの外交政策において孤立主義を強化し、それにおとらず現在では、帝国主義的な命題を増強しています。アメリカ人は敵と味方というかたちで世界を考える習性を身につけてしまいました。敵はどこかよそにいる、というのも戦闘はつねに「あっちのほう」で行われているのだから、という次第で、ロシアと中国の共産主義に代わって、今ではイスラム原理主義が「我々の生き方」を脅かす存在となったのです。テロリストというのは共産主義者よりは融通の利く言葉です。きわめて異質な多くの闘争や利害でもこの言葉で括ることができます。ということはつまり、たぶん、戦争は終わらないということです - というのも、なんらかのテロリズムはいつの時代にも存在する（貧困や癌がいつまでも存在し続けるように）からです。つまり、弱い側がたいていは民間人を標的とするテロリズムという形の暴力に訴える、非対称的な抗争はつねに存在するだろうということです。アメリカのものの言いも民衆の気分も、この不幸な見通しに合致していくでしょう。それは、正しいことを求める闘争にはけっして終わりが無いからです。》

自分が居住するアメリカを冷静に批判するソントグは、同様にアメリカの《優れた点》について、《古いものよりも新しいものを歓迎するタイプの保守的思考の形態を編みだした》ところにある、と冷静にみつめて指摘する。《たとえば、コンセンサスの常軌を逸した圧力や、世論やマスコミの受け身の体質や順応主義（...）を見れば、アメリカ合衆国はたしかにきわめて保守的であるわけですが、それと同じくらい破格に、アメリカは急進的でもあり、革命的でさえあり》、その謎は《公式な建前と生きた現実の乖離に起因している面が大きい（...）。アメリカ人はなにかというと「伝統」を賞賛し、家族の価値をたたえる念仏はあらゆる政治家の言説の中核をなしています。それでいながら、アメリカの文化は家族の生活を、いや、すべての伝統を極端に腐食させています。例外として腐食を免れていることといえば、家族を超えたより大きなパターンのなかで目立つこと、協力的であること、刷新にたいして開かれた姿勢をとることです。それをもって「自己認識」をする。そういう「アイデンティティー」のありかたを促進する方向で再定義された伝統があり、それらは腐食されないで続いています。》

では、《新しい（...）アメリカの急進主義のいちばん重要な源泉は何か。それは、かつては保守的な価値観の源泉とみなされていたもの》で、《宗教です。合衆国とほとんどのヨーロッパ諸国（...）との最大の差異は、合衆国では宗教が社会と公共の言説において中心的な役割を担っていることではないか、と多くのコメンテーターたちが指摘しています。でもこれは、アメリカン・スタイルの宗教です。つまり、宗教自体というよりも、宗教という観念という側面の強いものです。》

アメリカが《宗教という観念》性に強く覆われた国であるということは、具体的には

どのようなかたちをとってあらわれているか。

《合衆国は系譜的にいっても宗教的な国です。つまりアメリカでは、その人に宗教がありさえすれば、どの宗教に帰依しているかはたいして問題にされません。単にキリスト教的な（あるいは、キリスト教でも特定の名称をもつ）単独の支配的宗教をもつことは、神権政治でもなおさらそうですが、アメリカではあり得ません。アメリカでは宗教は選択の問題でなければならないのです。この近代的な、どちらかといえば無内容な宗教に関する考え方は、消費者の選択肢と並行して構築されたものですが、これがアメリカの順応主義、独善、そして道徳主義（これをしばしばヨーロッパの人々は、慇懃無礼にもピューリタニズムと取り違えます）の基盤をなしています。さまざまなアメリカの宗教的な存在が、自分たちの代表している歴史的信条としてさまざまなことを言っていますが、すべては似たようなことを説いています - 個人の行動の改革、成功の価値、共同体の協力体制、他者の選択に対する寛容さ（すべては、消費資本主義の機能を延命させ平滑化する徳目です）。宗教的であるというまさにその事実が、立派な人という評価を保証し、秩序を促進し、また、世界を率いていくアメリカの使命には徳にかなった意図がある、という保証を賦与するのです。

現在広がっているもの - それが民主主義、自由、文明、なんと呼ばれていようと - は現在制作進行中の作品の一部であり、それはまた、進行、進歩そのものの精髓でもあるのです。アメリカにおいて世界のどこに、進歩という啓蒙主義の夢がこれほど肥沃な土壌を得て存在しているでしょうか。》

宗教的であることと消費的であることが、なんのためらいもなく共存し、ブルドーザーのように精力的に押し進められていく国、それがアメリカである、ということが語られている。宗教的と消費的とが両立しているということは、宗教的であることがけっして内面化されずに、消費されていくということであり、また消費的であることが宗教的であることにまで高められていくことを物語っている筈だ。《アメリカでは宗教は選択の問題でなければならない》ということは、アメリカでは消費は選択の問題でなければならないということであり、《アメリカでは、その人に宗教がありさえすれば、どの宗教に帰依しているかはたいして問題にされ》ないということは、アメリカでは、その人に消費指向が十分に備わってさえいるなら、どの消費に偏向しているかはたいして問題にされないといいかえることができる。アメリカでは、どの宗教にも帰依しないこと、つまり、無宗教であることと、消費に精力的でないこととが、《進歩という啓蒙主義の夢》の促進に逆らうものであることは論を俟たない。

さて、ヨーロッパとアメリカの対照（対立）について歴史的に観照し、アメリカという国の優れた点や、特質について語ってきたソントグは、両者の反目についての和解の《モデルは、「旧」と「新」というあの由緒ある対立項についてのより深い思考に内在してい》るとして、こう説明する。

《「旧」と「新」は感情および世界における方向感覚のすべてを律する恒久的な二極をなしています。古いものがなくては困ります。古いもののなかに、私たちのすべての過

去、叡智、記憶、悲しみ、現実感覚が投入されているからです。新しいものに対する信念がなくても困ります。新しいものの中に、私たちすべてのエネルギー、楽観主義に向かう能力、無意識の生物学的な欲求、忘却の能力 - あらゆる和解に欠かせない治癒能力 - が投入されているからです。

内面生活では新しいものに不信を抱くきらいがあります。頑強に仕立て上げられた内面生活ほど、新しいものへの抵抗がとりわけ強くなります。旧か新か、どちらかを選べと私たちは言われます。じつは、両方を選ばなければならないのです。(中略)

分極化と対立をはかる思考様式を脱神話化する試みに、私は生涯のじつに大きな部分を費やしてきました。これを政治に翻訳すると、多元的で非宗教的なことならなんでも支持する、ということになります。一部のアメリカ人や多くのヨーロッパ人と同様、私も、多元的な世界 - アメリカはもちろん、いかなる単一国にも支配されていない世界 - に住むことを大いに歓迎します。極端なものごと、恐ろしいできごとの到来がすでに約束されている新たな世紀に入って、多種多様な社会改良論的姿勢への支持を表明してもかまわないと私は思っています。とくに、ヴァージニア・ウルフが「寛容の憂鬱な美德」と呼ぶものへの支持を。」

ヨーロッパとアメリカの反目を「旧」と「新」の二極的な相剋に解消して捉えようとするソクタグはもちろん、9・11以降のアメリカの覇権国家的な行動をアメリカという国の本質に根ざしているとは考えていない。しかし、アフガン空襲やイラク侵攻にみられる9・11以降のアメリカの行動を、アメリカという国の成り立ちそのものの本質が表面的な寛容さを突き破って、もはや容赦なく露骨に剥き出しにされていったとみなすなら、ソクタグ的な見方とは逆に、ヨーロッパとアメリカの反目は修復不可能な、決定的な対立として捉えられることは間違いない。両者の対立は一時的なものか、根源的なものか、修復可能か不可能か、それはわからないし、誰にもその先の歴史的な予言はできない・ソクタグだって予言は不可能だ。ただ彼女の立場には人間という存在への限りなき信頼がみられる。その信頼が彼女をしてヨーロッパはアメリカの「新」を見習い、アメリカはヨーロッパの「旧」にもっと敬意を払うべきだといわせるのであり、反対に人間に対する不信の度合いは両者の反目を行きつくところまで行きついた事態と容易にみなすにちがいない。

ソクタグの人間存在への限りなき信頼は、人間が生みだした文学(彼女にとっての)への限りなき信頼といいかえることもできる。文学をつくりだすような人間がどうして、人類の破滅に行きつくような決定的な対立を永続化させる愚かな真似ができるだろう、ということなのだ。《私のなかの作家は、善良なる市民、「知識人大使」、人権活動家 - みな、今回の賞の授賞理由に記載されている私の別の役割であり、いずれにも挺身しているのはたしかなのですが - を信用していません。正しいことを行おう(支持しよう)とする個人に較べると、作家はもっと懐疑的で、自己への猜疑心も大きい》という彼女は、文学についてこう語る。

《文学の任務のひとつは問いを提出して、支配的なもろもろの信念に対抗する表明を構

築することです。たとえ芸術は対抗的なものではないとしても、それは正反の矛盾の方向へと重力を増していきます。文学は対話であり、反応の行き交いです。複数の文化が進化し相互作用をするのにもなって、活気を得ていくもの、また、消滅していくもの。それらに対する人間の反応の歴史が文学である、とも言えます。

私たちは乖離している、差異は大きい、という常套句と闘うために、作家は何らかのことが出来るはずです - 作家は神話の単なる伝達者ではなく、創造者でもあるからです。文学は神話はもちろん、反神話も提供します。生きることが反経験を提供するように - 自分はこう考えた、感じた、信じた、といったんは考えたことを、混乱に陥れるような経験を。

思うに、作家は世界に傾注している存在です。つまり、人間がいかに大きな邪悪さを発揮しうるかを認識しよう、受容しよう、その面に回路をもとんと努めている存在です。それでいて、その認識によって墮落 - 冷笑的、表層的になりさがる - させられることをよしとしない存在です。

文学は、世界とはどのようなものを私たちに教えてくれます。

文学は基準を与え、言語によって、また物語によって具体化された深い知識を伝えてくれます。

文学は、自分たち自身でも自分たちのものでもない存在のために涙を流す能力を醸成し、鍛錬してくれます。

自分たち自身でも自分たちのものでもない存在に共感できないとしたら、私たちはどんな存在になっていたことでしょうか。少なくとも何度か、我を忘れることがなかったとしたら、私たちはどんな存在になっていたことでしょうか。もし学ぶことが、許すことが、自分たち以外の存在になることが出来なかったとしたら、私たちはどんな存在になっていたことでしょうか。》

ソクタグの講演はその後、《ポーランドとリトアニア出身のユダヤ人の血統をもつ三世のアメリカ人として、ヒトラーが政権を握る二週間前に生まれ》た彼女が、自分の通った《アリゾナ州南部の小さな町の小学校の教師》に導かれて触れた《ドイツ文学の理想主義》や、《何人かの抜きこんで優秀なヒトラー政権下のドイツからの難民と知り合いになった》こと、10代後半、そして20代の初めに会った数々のドイツの友人たちなど、ドイツ(人)との少なからぬかわりに移っていくが、その交渉史のなかに《20代半ばにニューヨークに越してから知り合ったハナ・アーレント》の名前も見出される。最後に70年、彼女の著書が刊行され始めたハンゼル社の編集者フリッツ・アルノルドが、何千というドイツ兵の一人として《北アリゾナで戦争捕虜となっていた》ことがわかり、その頃ユダヤ人であるソクタグは《同じ州の南部にいて、今にもあちこちから現れてきそうなナチの兵隊の幻影に脅かされながら、逃げることも出来ないでいた》という逸話を披露する。

《フリッツは、アリゾナの捕虜収容所にいた三年近くも彼を支えていたのは、本の入手が許されていたからだと言いました。その間、英米古典文学の本を繰り返し読み続けた

そうです。私は、早く大きくなりたい、早くもっと広い現実世界へ逃げていきたいと思っていた、子供時代の私を救ったのは本、それも、もともと英語で書かれた本ばかりではなく、英訳されたさまざまな本だった、と話しました。

文学、世界文学に手が届くということは、国の虚飾、蒙昧、偏狭さの強要、空疎な学校教育、中途半端な将来の進路、運の悪さ、といった檻から逃げ出せるということの意味します。文学はより大きな生活の場、つまり、自由地帯に入ってゆくパスポートでした。

文学は自由そのものでした。とくに、読書や内向的な生活の価値が呵責なく脅かされるような時代には、文学は、自由にほかなりません。》

文学に関心のない、無縁な人々 - 小説や詩に接することのない人々にとって、「文学は自由そのものである」と語るソクタグの言葉はどのように響くのだろう。彼女の言葉は彼女と同様に、文学に関心のある人々にしか受けとめられないものなのだろうか。彼女が少女時代に味わったような、《異常に本に飢えていた》体験を共有することがなければ、彼女の言葉は人々に届くことがないのだろうか。もちろん、彼女の演説に集まった人々は、作家としての彼女や彼女の公共的な行動に関心をもった人々であるだろう。したがって、彼女の言葉は目の前に集まっている人々に向かっているのはいうまでもないとして、そのような人々にだけ向かっているのだろうか。《文学は、自分たち自身でも自分たちのものでもない存在のために涙を流す能力を醸成し、鍛錬してくれ》としても、その《自分たち自身でも自分たちのものでもない存在》は、そんな文学をどんな遠くから眺めることになるのだろう。《文学はより大きな生活の場、つまり、自由地帯に入ってゆくパスポート》であるなら、その「パスポート」は文学から非常に遠い人々が存在している場所にどのように往き来することができ、どこまで有効なのだろう。

以上の問いに応答しようとするなら、文学は非文学的な領域にまで拡大しなければならなくなる。すると、文学はこれまでの文学的な概念をも超えていかなければならない。「文学は自由そのものである」という命題は、自由は文学そのものである、という命題にまで引っくり返って追っていく必要があるかもしれない。少なくともそこでは文学といういいかたすらあまりにも限定されており、文学は文学以外の領域においても「自由そのものである」か、という問いが迫り出しつつあるのを感じる。文学という言葉だけを別の言葉で無数にいいかえることが出来る場所のなかでしか、文学そのものもはや成立しがたい時代の困難さに見舞われているとするなら、「報復は自由そのものである」という命題のなかで文学について、非文学的にどこまで語ることができるか、試みてみようと思う。

《「9・11」テロで愛する者を奪われながら、アメリカの報復と戦争に反対している人々》で結成する「ピースフル・トゥモロウズ」(平和な明日を)には現在103家族が参加しているが、その共同幹事の一人で、事件前はジャーナリスト・プロデューサーを勤めていたデイビッド・ポーターティが、社会学者の大澤真幸と『世界』(04・2)で次のように語り合っている。大澤が、《テロリズムの犠牲者、あるいは遺族たちは、テロリストに対していちばん強い憎しみを覚えているだろう、だから、最も強く戦争を

支持するに違いない》のに、《「ピースフル・トゥモロウズ」の人々は戦争に反対し、平和的な解決を求めている》、それはどこから来るのかという疑問を呈すると、ポーターティはこう答える。

《もちろん犠牲者や犠牲者に近かった人びとは、だれでもがあの行為に対しての怒りをもって》るが、《大事なのはその怒りをだれに向けるか》であり、長兄を失った《私の怒りは、はじめはもちろん実行者に対して向けられました。が、それ以上にアメリカの政府に対して向けられました。》それは、《1日当たり10億ドルもの国防費を費やしている》アメリカ合衆国で、《なぜこのようなことが起きてしまったのか》という疑問を感じたからだ。《もちろん、空しさ、無力感を私は感じました。なぜなら、あの行為の責任を追及しようとしても、実行者たちは、すでに死んでいるからです。その人たちには、責任を果たさせることができない。空しさと無力感を持ちながら、その一方で、私のなかにふつつつとエネルギーもわいてきました。そのエネルギーをどこに向けたいか、何にぶつければいいかということがあって、それがいまのような活動を起こす動機になっています。》

9・11以後のアメリカ政府が、憲法の枠内でぶつけていこうとする《私自身の怒りやエネルギー》に対して超法規的に対応してくるのに、《私の無力感》は増大し、《自分がまったく意味をもたない、機能しない、存在が抹殺されたような気分になりました。そして、失うものは何もないという気持ちになったとき、もう躊躇する理由は何もないではないかと考えました。すぐに多くの人びとから支持される意見ではないかもしれないし、批判も受けるかもしれない。しかし、自分の意見ははっきりと言おう、そう決めたのです。》

もう一つ、そういった活動を始めて気がついたことは、国もそれなりに整然とし、また金持ちの国であるアメリカにあっても、私のような立場になったら、失うものは何もないと思うわけですから、ましてやアフガニスタンやイラクなどの貧しい国の人びとが、もっと自暴自棄の気持ちになるのはあまりに明らかなことです。さらにアメリカ軍などによる爆撃は、その気持ちをさらにつのらせるのです。これらの国の人々は、一世代まるごとがそういう自暴自棄な、もう失うものは何もないというところに追い詰められているわけです。いまアメリカがやっていることは、そうした自暴自棄の気持ちを一層増大させ、怒りの内圧を大きくさせて、さらなる爆発を彼らのなかから呼ぶことだと思います。》

自分の悲しみに閉じこもらずに、その悲しみを相手の悲しみと打ち重ねて自分を開いていこうとするポーターティが、アメリカのメディアが自分たち犠牲者、《3000世帯に調査をして、戦争をやるべきかやるべきでないか、支持するかしないかということ》を聞こうとせず、《遺族のほんとうの気持ちを知ることよりも、この部分をグレーゾーンとしておくことのほうが、利用しがいがあると考えているのではないか》という疑念を発すると、大澤は《いまアメリカは遺族の感情を、あらゆる行動を正当化する根拠にしている》と相槌を打ち、《テロの問題を考えると、テロを誘発するほんとうの原因

をなくさなければ意味がない。テロリストを最も徹底して出し抜き、テロを無意味なものにしてしまう行動は何だろうか、と。普通は軍事攻撃するとテロリストは困ると思うかもしれませんが、むしろ軍事攻撃はテロリストにとっては都合がいい。》といい、こう提案する。

《そういう反米的なテロリストや政治的なリーダーにとっていちばん怖いのは、実はアメリカを攻撃することは無意味だということが示されることです。だから私はこう考えたのです。むしろアメリカは、(そして日本も)アフガニスタンに贈与すべきだ、積極的に経済援助をすべきだ、と。そういうことをすれば、たとえばタリバン政権やアルカイダのような反米的なグループに対する大衆的なサポートがなくなるはずです。そのことこそ最もテロリストにとって恐ろしい事態ではないか。》その提案に共感を示すポトーティは、《テロリズムそれ自体が核心的な問題なのではない、テロリズムというのは症状にすぎ》ず、《反戦運動家のハワード・ジンは、一つ一つのテロリストの行為の背後には、そういう置き去りにされた悲しみ、嘆きが必ずあると言っています》といい、アメリカの歴史認識に対する無知を取り上げる。

《アメリカ人は歴史、歴史の教科書を自分たちにとって都合のいいことばかり書く。客観的にみて問題であったこと、悪いことは書いてない。これは歴史認識をもつ能力がないのではなくて、知りたくないということです。他者を傷つけてきた、踏みにじってきたことは明らかにしたくない、知りたくない。頭のなかではわかっている、心はそれを拒絶する、あえて無知の状態に自分たちをおいておく、と。これを打破しない限り、私たちはこの問題に関して正しい姿勢での取り組み方はできないと思います。》

アメリカ人の本当のことを知ろうとしない一つの例として、彼はこう示す。《たとえばアメリカのなかで、私たちが、援助によって平和、安定した状態をつくり出すことが第一であって、これ以上攻撃しても無意味だということをいいますと、アメリカは世界中に寛大に援助をばらまいてきたではないかと批判が返ってくる。そのお返しが9・11なのか、というのが彼らの怒りの根拠です。しかし、はたしてそうだろうか。膨大な額のアメリカの海外援助は、ほとんど二つの国にしかいってない。イスラエルとエジプトです。大半はイスラエル。それに比べればずっと少額がエジプトです。それ以外の国にはほとんど何もいっていないといってもいいぐらい、少ない。まずその誤解を解かなければいけない。》

ポトーティは更に、アメリカの内政干渉が典型的な例としてサウジアラビアを以前と比較して、《保守的な原理主義的な国》にしたことを付け加える。大澤はアメリカの援助の大半がイスラエルにしているというポトーティの話に触れて、《自分の味方には援助しよう》という発想を逆転させて、敵と思われる相手にこそ援助する必要があるのではないかと論じる。

《自分にとって都合の悪い人、場合によっては敵に見える人、罪のあるように見える人に対してさえも、時には援助しなければいけないときもある、と。あるいはそういう人たちが得するのを恐れてはいけないということです。アフガニスタンに私が援助すると

いうアイデアを出したときに多くの人が反発したのは、そんなことをしたらタリバン政権やアルカイダが利益を得るではないかということです。もちろんその可能性はあるのです。しかし、よく考えてみると、だれがアルカイダで、だれがタリバン政権かなどということは実は非常にあいまいです。むしろタリバン政権の熱狂的な支持者が得してもかまわないというぐらいの勇気をもって援助する。そのことが逆にタリバン政権の支持基盤を壊していくと思うのです。私の援助を受けたかったら、まず私の味方になりなさいという態度ではいけない。むしろ援助するということが先で、それで相手が味方になる。因果関係が逆だろうと私は思います。テロリストがテロリストでなくなるならばそのほうが良いと考えなければいけない。》

大澤の考えに同感してみせるポトーティは、《民主主義という名のもとにそうでないものが行われている》アメリカを見ていると、《私たちも努力してあなろうと思う例題にはなり得ない》のであり、《9・11の非人道的な、人間とは思えない行動に対する、精神的な意味での私たちの応じ方は、より人間的にふるまうことだと思うのです。敵を駆逐する最善の方法は敵を味方にすること、という諺がありますが、それと同じことではないかと思》うと語る。大澤が、当時、サンディエゴに住んでいたコロンバイン・ハイスクールの学内乱射事件の犠牲者の一人のレイチェル・スコットの追悼集会の様子をテレビで見たときの感動について、次のように話す。

《犯人は高校生だったので、犯人の親にどのくらい責任があるのかということが当時大きな問題になっていた。それでレポーターはレイチェルの両親に、あなたは犯人の親に責任があると思いますかと質問をしたのです。そうしたらレイチェルの母親は即座に「そんなことはない、100%ノーである」と答えたのです。すると、レポーターは、少し挑戦的に、あなた方は犯人の両親を赦すのですかと尋ねました。これに、レイチェルのお母さんは「むしろ赦す」と。その上でこうまで言ったのです。「両親を赦すだけではなくて、私たちはある意味で犯人すら赦す」と。そのすぐ横にレイチェルの父親もいて、妻の言葉を引継ぎ、「もしここにレイチェルが生きていれば、レイチェルこそがいちばん最初に犯人を赦したであろう」と言ったのです。》

大澤は犯人に対する憎しみが募ってくるのが通常なのに、《大きな犠牲と悲しみのなかで、事件から一週間も経たないときに、犯人を赦すと言える人がいる》ことに、《非常な驚きを感じ》、その驚きはポトーティたちの運動にも感じられるものであり、《敵意と憎しみによって戦うのではなくて、赦しの精神で戦うという、そういうことをする人がアメリカにはいて、それは日本ではあまり見たことがない》という。ポトーティはその話に、息子を失った父親がテレビで犯人の父親がしゃべっているのを見て、その父親に会いに行き、《その人のなかに自分と同質のものが反映されている》のを感じ、《一方は犯人、殺人者として、一方は殺されたものとして》共に息子を失い、《そこには共通する痛みと悲しみがあって、それを分かち合うことができ、自分ではどうしようもなかった状態から解放されたとい》う話を重ね、二人の対話は次のような結びへと辿り着く。《大澤 (... )ある意味でほんとうに赦せる人は死んでしまった犠牲者だけなんですね。

同じように、ほんとうに怒る権利をもっているのも死んだ人だけだと思う。つまりわれわれは簡単に犠牲者の気持ちになって怒ったり赦したりほんとうはしてはいけないのだと思います。だから、私たちは犠牲者のことを考えなくてもいいということではない。むしろ、逆で、私たちは絶対に真の犠牲者そのものではありえないという、犠牲者との距離の感覚こそが、犠牲者への関わりを動機づけるわけです。

**ポトーティ** 私はそれでも自分の兄のための報復をしているという気持ちはありますよ。ただ、その報復は暴力による報復ではない。むしろより真理を究めることによって、なぜこんなことが起きてしまったのかということをはっきりとつかむことによって、もっと言えば、再びこういうことが起こらないために、真理を知りたいわけです。でも、絶対これをやってやるぞという報復的な気持ちはあります。暴力を使ってないけれど、これは戦いなのです。それは、愛の究極的な表現であると私は思っています。

大澤さんは、アメリカのなかに可能性を見出されたといわれましたね。でも、アメリカは、まだ怒り、憎しみが強くて、怒りのなかにとらわれてしまっている状態だと思えます。ほんとうに大事な人、愛する人を失った悲しみに直面して、そこを通過すれば怒りも消えるだろうし、もっと自由になるでしょう。でも、まだアメリカは直面するまでに至っていない。というか、直面したくないのです。(中略)アメリカ人がそうであるがゆえに、戦争や攻撃が展開しているわけです。その犠牲になる人たちに対しては、ほんとに悪いことをしていると思います。みずからが直面できない弱さゆえに、相手に対して攻撃しているわけですから。》

この対話から、文学もまた報復の一種であり、報復もまた文学の一種であり、「文学は自由そのものである」とソントグがいうなら、「報復も自由そのものである」といわなくてはならない気がしてくる。というより、自由な場所ではしか報復は行ってはならないのだ。そうでなければ、報復は必ずマイナスにしか働かないだろう。そのことを念頭に置いて対話に入っていくと、関係性の視点がそこに看過されているのを感じる。本当に愛する者を失った悲しみは、関係の喪失として訪れてくる筈だ。したがって、報復は関係の喪失が新たな関係を呼び込んでいく方向性で行使されていく必要があり、暴力による報復は関係の喪失をさらなる関係の喪失に押し進めていくものでしかない。

死者は二度と自分の目の前に立ち現れてくることはないから、新たな関係を加害者との間に打ち立てる以外にない。一つの間接喪失させた者は新たな関係を生みだすものとして現れてこなければならぬのだ。報復は加害者が新たな関係として立ち現れてくるようにならなければ、実現しないのである。いうまでもなく加害者が新たな関係として現れるためには、《なぜこんなことが起きてしまったのか》、なぜ自分はそんな振る舞いをしてしまったのか、について死者以外の被害者と加害者が一生を懸けて共同で追求していく作業が不可欠であると思われる。《これは戦いなのです》というのであれば、その「戦い」に加害者を参加させなくては「戦い」は限定されたものになってしまう。その「戦い」に《愛の究極的な表現》を見出すのであれば、その「愛」は加害者をも最大に包み込むものでなくてはならないだろう。

2004年2月24日記

